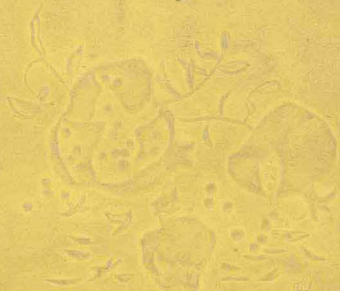


丸 岡 明

コンスタンチア物語

ざくろ文庫

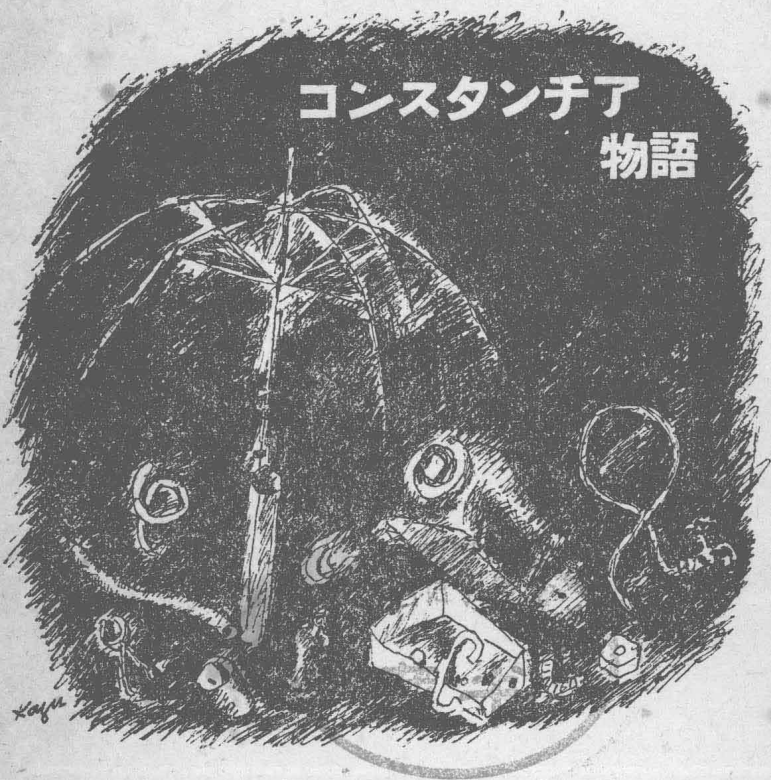
— 7 —



能 楽 書 林

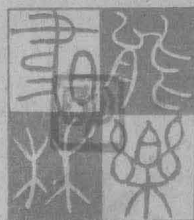
丸岡 明 小説集

コンスタンチア
物語



ざくろ文庫

能 樂 書 林



略 歴

明治四〇年六月東京に生る。
慶大文學部佛文科卒。著書—
「生きものの記録」「やくざな
犬の物語」「悲劇喜劇」等。

昭和二十四年四月二十五日印刷
昭和二十四年五月五日發行

ゴンスタンチア物語 定價一五〇圓

著 者 丸 まる 岡 おか 明 あきら

發行者 丸 岡 太 二

東京都千代田區神田神保町三ノ六

印刷者 小 澤 鐵 太 郎

東京都中央區木挽町四ノ二

印刷所 京屋出版印刷株式會社

配給元 日本出版配給株式會社

發行所 能 樂 書 林

東京都千代田區神田神保町三ノ六

會員番號 A 二一四一一五
電話九段(33)〇八一三・二二八五

(山田製本)

コ
ン
ス
タ
ン
チ
ア
物
語

コンスタンチア物語

9

野の花

51

幻影

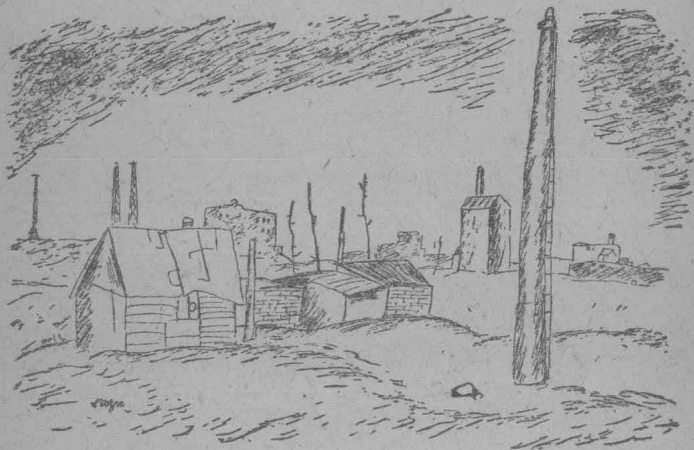
139

後記

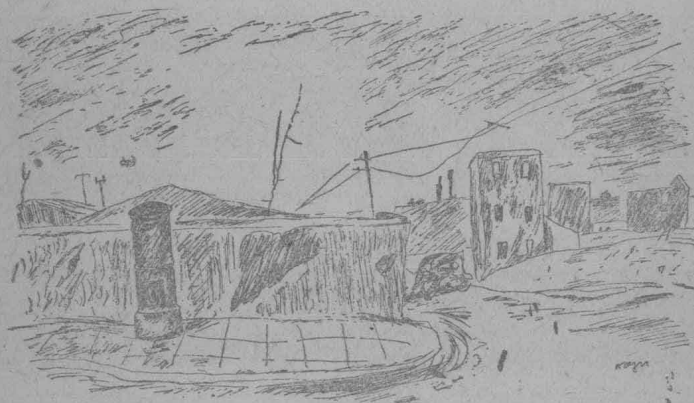
181

デ
ッ
サ
ン
・
脇
田

脇









コ
ン
ス
タ
ン
チ
ア
物
語

「敗戦後、僕がね、これからお話をする杉村道太郎氏——杉村先生と呼ぶことにしませう——その杉村先生を初めて見掛けたのは、あれからやつとふた月餘りたつた十月の終りの頃か、十一月に這入つて早々のことでした」と彼は云つた。

停電で眞暗な私の部屋の縁先には、月の光が明るかつた。私と彼とは、その月の光の中に坐つて、煙草を喫つてゐるのだつたが、その縁先から下に見える暗い庭の茂みでは、蟲の聲がしきりにして、その聲が二階の縁先にゐても、耳を覆ふほどだつた。

彼が次のやうな話をし始めたのも、實はその蟲の聲と、月の光のせゐだつたかも知らない。

「まだあの當時は、誰も彼も戦闘帽を被つてゐて、ベレなんか被つてゐる者はゐやありませんでした。僕も實は戦争中、たうとう戦闘帽を被らなければならぬはめになつて、——さうさう、

在郷軍人會の召集の時など、戦闘帽を被つて來ないやうな奴は、非國民だと云ふ騒ぎだつたちやないですか。現に僕は、ソフトを被つて、これから十日間、毎夜續くといふその召集に出ていつて、最初の服裝點檢の時に、そのソフトを取り上げられ、二百名餘りの町内の者が集つた國民學校の校庭で、うんと脂をしばられたことがあるんです。何百燭光かの電燈に反射鏡をつけて、耿々と照らした校庭には、四十二歳以下で軍隊教育を受けてゐない町内の者が、その基礎訓練を受けるために、何分隊かに分れて整列をしてゐるわけなのです。その教官に當つた中尉が、校庭の青桐の前に出來た壇に上つて、ひと通り訓辭やらなにやらを述べた後で、

「誠に遺憾なことは、在郷軍人會から、皆さんのところに廻した紙片にも、服裝は國民服を着用のこと、そして帽子は戦闘帽に限る旨を明記してあるにかゝはらず、それを無視して來てゐる者が二三あつた。服の方は、事情を訊いてみると、情狀酌量の餘地がないでもなかつたが、ソフトを被つて、この神聖なる場所へ出てきた者のあつたことは、決戦下の今日、全く情けない限りである。本町内の在郷軍人會の名譽にかけて、そのやうなウジャジャけた精神の者が、今後一人も居らぬやうにするために、これから十日間、嚴格なる訓練をしようと思ふ。」云々と云つたのです。

その中尉は、學校教育も一應すませた役人でしたが、云ふところの役人根性から思ひ上つた氣持になつて、ついウジャジャけた精神など口を滑らしたものでせうが、僕にはそのひと言が、聞き捨てに出来ない氣がして來て、體がぶるぶると震へるぐらゐ吐立しい思ひを味はみました。

話が横道にそれましたが、國民服の借着は出來ても、あの非文化的な戰鬪帽といふ奴を、頭の上に乗せるには、僕は僕なりに、相當の屈辱を忍ばなければならなかつたんです。その時は、友達から國民服と一諸に借りてあつた戰鬪帽を、二日目の夜から被つて國民學校の校庭へ出掛けてゆきました。その後ますますあの忌はしい戰鬪帽が幅をきかせて來て、あの帽子を被らぬと、人にも逢へぬやうなことになつて來たので、遂に僕も、古いソフトを親類の女の子に造り代へてもらつたやうな次第でした。一度屈辱を忍んで、戰鬪帽を被つてみると、これも餘談になりますが、不思議なことに、どんな悪いことでも、良心の呵嘖などと云ふものを受けずに、平氣でやり遂げられさうな氣がして來るのです。皆と同じ服裝をし、皆と同じ帽子を被つて、一人一人の區別が明瞭でなくなると云ふことは、隠れ蓑を頭からすつぱり被つてゐるのと同じことで、それが、そのやうな不埒な氣持にさせるのでせう。現にその頃、軍需品の闇買ひやら闇賣りをやつて、警視廳にあげられて來た男達は、誰も彼も、立派な國民服に戰鬪帽だつたと云ふことです。僕はそ

れを聴いてなるほどそんなものだらうと思つたものでした。

ところで、もとの話に戻りますが、僕も五月に家を焼かれてからは、帽子と云つても、先程お話をした親類の娘に造つてもらつた戦闘帽があるきりなので、この春まで、ずっとその茶色の戦闘帽を被つてゐました。ペレを被つた杉村先生を、代々木の驛で見かけた時も、僕はその戦闘帽でした。

その頃の乗り物は、今よりもつとつと込んでゐました。しかしまだ疎開者が、それ程多く東京へ歸つて來てゐない頃のことなので、ひと頃のやうに、毎日何人電車から振り落されるといふやうな話は、まだ聴かぬ頃だつたと思ひます。それにしても、荷物を背負つた人達が多く、それに敗戦直後のことで、人の心がすさみ切つてゐましたから、電車の中のあちこちで、絶えず喧嘩があるといふ有様でした。省線電車が、代々木に着いて、どつと人が先を競つて流れ出ると、その人の流に雜つて、ペレ帽が——それがどうも杉村先生らしかつたのです。なに分にも、人が大勢流れ出て、すぐ又どつと人が押し合つて乗つて來ると、ちぎに電車が動き出す。その動いた電車の窓から、今降りていつたブラットホームの人群の中に、ふと杉村先生らしい人を見掛けたといふわけなので、勿論聲も掛けはしませんし、先生の様子を注意深く見るといふわけにも